

# THE A MUSEUM

Vol.8-1 第22号 2013.6.27

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

**企画展**

## 絵で語る埼玉の民話

～池原昭治・童絵の世界～



平成 25 年  
**7.20<sup>土</sup> → 9.1<sup>日</sup>**  
9:00 ~ 17:00 (入場は 16:30 まで)  
毎週月曜日は休館です  
観覧料 一般 400 円 高校生・学生 200 円  
\*中学生以下、身体障害者手帳等をお持ちの方は無料  
協賛 FM NACK5・埼玉クラブ株式会社・埼玉新聞社・テレビ玉

「まんが日本昔ばなし」などのアニメーションの制作者としても知られる狭山市在住の池原昭治先生が、童絵(どうえ)という心あたまる画面で描いた作品により、埼玉県内で語り継がれてきた伝説や昔話を紹介する楽しい企画展です。どうぞお楽しみに!

埼玉県立  
歴史と民俗の博物館  
Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

〒330-0803 さいたま市大宮区高島町 4-219 TEL 048-645-8171  
http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp FAX 048-640-1964

この夏に開催する企画展「絵で語る埼玉の民話—いけはらしょうじ どうえ 池原昭治・童絵の世界—」は、『まんが日本昔ばなし』などのアニメーションの制作者としても知られる狭山市在住の池原昭治氏が描いた心あたまる「童絵(注)」により、埼玉県内に伝わる民話を紹介する楽しい催しです。

時代や世代を超えて語り継がれ、伝えられてきた

「なつかしいふるさとの原風景」を描き続ける池原昭治氏の童絵の世界を、この機会にお楽しみください。ぜひ、ご家族でのご来館をお待ちしております。

(注) 池原昭治氏が自身の絵の世界を表現した言葉。民話、祭り行事、伝承遊び、後世に伝えたい風景などをテーマにし、ほとんどの絵の中にはおなじみの童の姿が描かれています。



## ■「民話」について

私たちの身の回りには、昔から語り伝えられてきた話がたくさんあります。民話とは、こうした時代や世代を超えて語り継がれてきたさまざまな話をまとめた言葉です。

民俗学の用語としての「民話」は、さらに伝説・昔話・世間話などに分けることができます。伝説とは、特定の地名や物事の由来などを伝える話で、その土地と深く結びついています。これに対して昔話は、「むかしむかし、あるところに」という言葉で始まるように、場所や時代、人物などを特定しないで語られる空想の物語という性格を持っています。また世間話とは、その土地の人々が見聞したさまざまなこと（たとえば、狐に化かされた話など）を語り伝えたものといえるでしょう。

私たちの祖先は、こうした民話を通じて身の回りのさまざまなものに関する知識や生活の知恵などを子孫に伝えてきました。今では昔のように民話を直接耳にする場がほとんどなくなりましたが、民話をテーマにした池原昭治氏の作品（童絵）には、まさに「絵で語る」ように民話の世界が表現されています。会場では、ぜひ作品を目にしながらか、絵の中に描かれた人物の会話や前後の場面などを想像してみてください。きっと、民話の世界を身近なものとして楽しんでいただけることと思います。

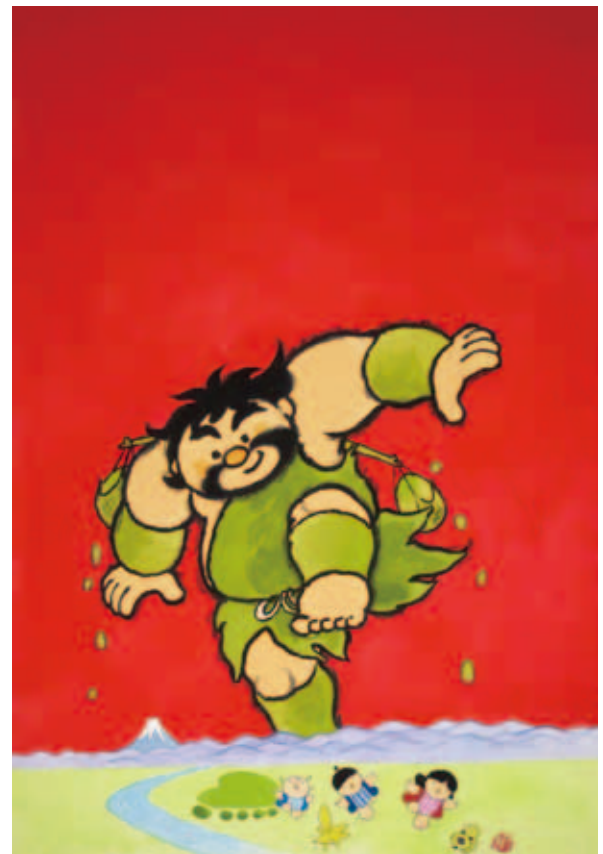
## ■池原昭治氏と埼玉の民話

池原昭治氏は、1939年に香川県の高松市にお生まれになりました。子どもの頃から絵を描くのが大好きで、四国新聞社でカットや漫画を描く仕事に就いていましたが、1963年に上京して東映動画に入社し、『わんぱく王子の大蛇退治』を皮切りとして、1972年に退社されるまで主に長編アニメ映画の動画や原画を担当しました。この間、結婚を機に東京都練馬区から埼玉県南西部の狭山市に転居されました。

池原氏が民話に関心を持ち、採集を始めたのは20代半ばのことで、そのころ採集した民話は、のちに民話集『讃岐の絵本』として刊行されました。東映

動画時代には趣味の登山を通じて知った山の民話を描いた作品展を丹沢の山小屋で行い、神奈川新聞に連載した『丹沢の絵本』も民話集として刊行されています。

狭山市に転居されてから、池原氏の民話採集は秩父方面へと広がっていきます。狭山から自転車で正丸峠を越えて秩父でたくさんの民話を聞き集め、1975年には朝日新聞埼玉版で『昔語り 秩父の民話』の連載を40回にわたって行いました。この連載が縁となり、翌年秋に開館した埼玉県立博物館では池原氏に作画をお願いしてオリジナルのスライド「埼玉の伝説(1~4)」を制作しました。また、狭山市・川越市など入間地域や秩父地域を中心に埼玉県内の民話や祭りなどをテーマにした著作も次々と刊行され、1982年から制作に携わったアニメ『まんが日本昔ばなし』の作品の中でも埼玉県の民話に取り上げられています。



だいだらぼっち ©池原昭治

池原氏は、1993年刊行の画集『カッコウの鳴く朝』の中で「民話絵」という独自の絵の世界について「昔話、伝説、わらべ唄、お祭りなど、特に子どもが中心の年中行事を素材にして、なつかしいふるさとの原風景を表現しようとするもの」と説明しています。また、1970年代の初めに秩父の札所をめぐる時、とある巡礼道の辻に草に埋もれて立っていた小さな石仏に、ふと通りかかった女の子が持っていた野花をそっとたむけ、小さな手を合わせていた姿を見て「この風景こそ、私が求めていた絵の世界だと思ったのです」と、民話絵を描き始めたきっかけを語っています。その後、後世に伝えたい各地の風景の中に子どもが遊ぶ姿を描いた作品が多くなってきたため、2000年ごろからそれまで使ってきた「民話絵」という言葉に代えて「童絵」という言葉を使うようになりました。

池原氏の作品の特徴の一つは、民話とその話が語られてきた土地との結びつきをとっても大切にされていることだと思います。作品にも、そうした土地の風景がスケッチを元に描き込まれているものがたくさんあります。民話の中に語られている、いわば「心のふるさと」としての埼玉の原風景を、池原氏の童絵の世界の中に訪ねてみましょう。



かわばた わ じょうもん  
河童の詫び証文 © 池原昭治

## ■展示の概要

池原昭治氏がこれまで約40年にわたって描き続けてきた埼玉の民話をテーマにした作品の中から「自然のはなし」「人間のはなし」「神や仏のはなし」「動物と妖怪のはなし」の4つのテーマに沿って選んだコーナーや、「童の伝承遊び」を描いた作品など、原画約100点を展示します。

加えて、池原氏が演出のために作成した絵コンテや、ご自身で作画されたセル画や背景画など、アニメ『まんが日本昔ばなし』の制作にかかわる資料も展示します。

また、企画展の会期中は常設展示（季節展示室）でも「埼玉の風景－池原昭治・童絵の世界－」と題し、武蔵野の里山をはじめ県内各地の風景や祭り・行事を描いた作品の原画約50点を展示します。

この夏は、池原昭治氏の童絵の世界を、埼玉県立歴史と民俗の博物館で存分にお楽しみください。

### 〈関連事業のご案内〉

#### ■記念講演会「埼玉のおもしろ絵ときで語る民話」

日時：8月25日（日）13:30～15:00

講師：池原昭治氏（童絵作家・高松短期大学客員教授）

会場・定員：当館講堂 定員150名（抽選）

費用：無料

申込：往復はがきまたは電子申請

（受付期間は7月1日～8月6日、期間内必着）

#### ■アニメ上映会

日時：7月21日（日）、8月10日（土）、8月17日（土）、  
9月1日（日） 各13:30から1時間程度

上映作品：『まんが日本昔ばなし』より

会場・定員：当館講堂 定員150名（先着順）

費用：無料

申込：申込不要。直接会場にお越しください

#### ■ミニアート「だいだらぼっち」

日時：7月25日（木）、8月29日（木）

各9:30～、10:30～、13:30～、14:30～の4回

（所要時間約60分）

内容：ボランティアの指導により、和紙を使って「だいだらぼっち」の民話を表現します

会場・定員：当館エントランスホール 各回12名（先着順）

費用：100円

申込：当日会場にて受付

（展示担当 大明 敦）

# 「埼玉県立の博物館施設収蔵資料データベース」の作成と公開 <http://rekimin-database.jp>

## ■博物館にはどんな資料があるのか？

「博物館には、一体どのような資料がどのくらい保管されているのか？」歴史と民俗の博物館では、昭和46年の開館以来、購入や寄贈などにより年々収蔵資料を増やしてきました。どれも埼玉県の歴史や民俗を知る上で重要な資料ばかりで、現在、歴史、古美術、民俗、考古資料など約12万2千点を収蔵しています。

ところが、これらの資料を全て一度に展示することは不可能です。定期的に展示替えを行い、できるだけ多くの資料を展示するよう努めていますが、一度に展示出来るのは収蔵資料のごく一部です。

そこで、当館では、これまでもホームページに資料紹介のコーナー（ベストコレクションとギャラリー）を設け、定期的に更新しながら、代表的な資料について紹介を行ってきました。

## ■収蔵資料12万点超をネット公開

しかし、代表的な資料だけでは、膨大な収蔵資料の全体を把握することは不可能なため、当館では、まず、収蔵資料を統一したデータ形式で写真とともに記録するデータベース構築事業に平成21年度から着手しました。収蔵資料目録を基に一点一点資料とラベルを照合し、写真撮影を行うという気の遠くなるような作業を経て、収蔵資料データベースが平成23年度に完成しました。

そして、平成24年度には、県立さきたま史跡の博物館、嵐山史跡の博物館、川の博物館が収蔵する資料

を一部含めた約12万7千点をインターネット上で公開いたしました。

これまで、各館が収蔵している資料を探すには、各館に問い合わせをいただいておりますが、各館のホームページにデータベースの入口が設けられたことで、4館の収蔵資料をどこからでも検索、写真閲覧できるようになりました。（一部閲覧できない写真もあります）

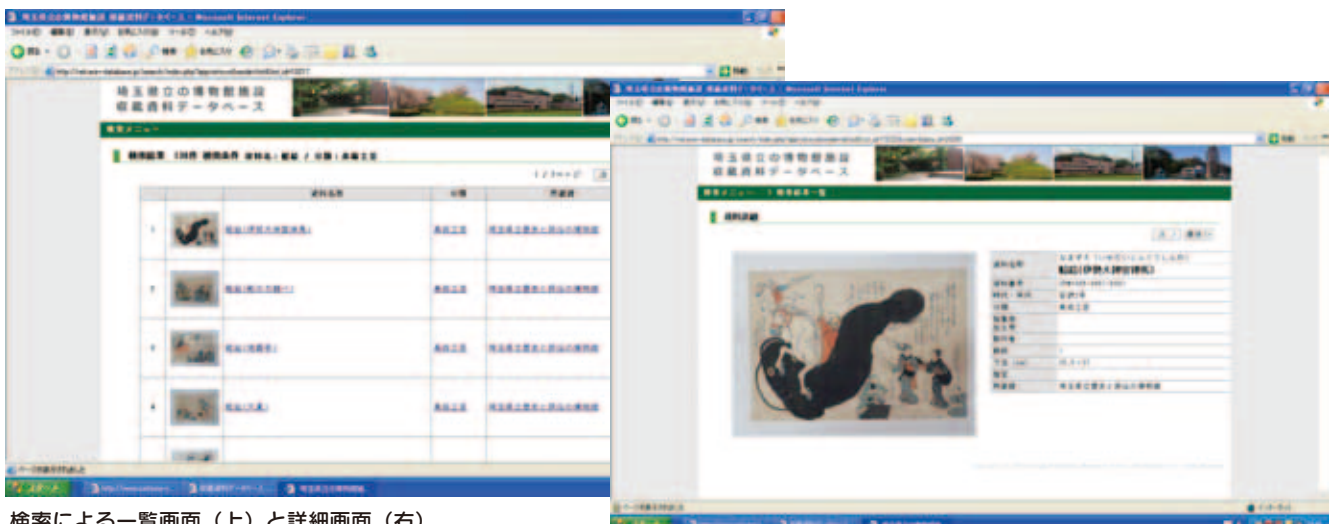
## ■資料の積極的活用を！

資料の画像が付いたデータベースが構築されたことにより、資料検索・照合などが、スムーズに行え、博物館事業の効率化がより図れるようになりました。また、インターネット上で公開することにより、外部からの借用依頼や写真原板使用、熟覧といった「特別利用」の申請も大変便利になりました。資料御利用の皆様には、利用したい資料をあらかじめ画像により確認いただき、様々な形で積極的に御活用いただくようお願い申し上げます。

## ■より使いやすく より長く

データベースの公開は、平成24年度末から開始し、平成25年5月末までに約18万件のアクセスがありました。今後、データの更新や修正等を継続的に行い、より便利で使いやすく、様々な学習場面で活用できるよう改良を図っていこうと考えています。

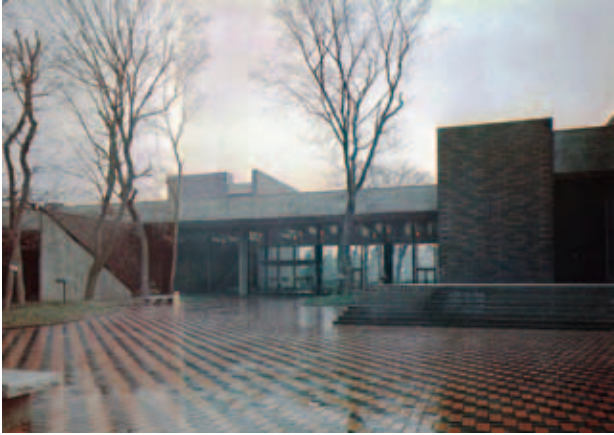
（資料調査・活用担当 野中 仁）



検索による一覧画面（上）と詳細画面（右）

# 建築物として見る歴史と民俗の博物館

緑に囲まれた公園の一角に佇む素焼きタイル貼りの印象的な建築物。年数を重ねても古さを感じさせないデザインである当館の建物は、建築から40年以上経った今も変わらぬ姿で訪れる方々を迎えています。



竣工当初の当館の姿

当館は1971年に、前川國男まへかわくに お氏(1905-1986)の設計で建設されました。

前川氏は言わずと知れた日本の近代主義建築を確立した建築家の一人です。暗褐色の落ち着いた色調に統一された前川独自の「打ち込みタイル」による外壁とタイル貼りの床面、そして大きな庇ひさしなどがこの年代における前川建築の大きな特徴です。

木々に囲まれた中庭を抜けてロビーに入ると、正面のガラス越しに大きな光を取り込む前庭が広がります。右手には一段高い位置に休憩コーナーを見上げ、左手には一段低い位置から吹き抜けが立ち上がり、懐の深い空間を形成しています。



休憩コーナーからロビーを見下ろす(現在)

竣工当初からこのデザインは注目され、日本芸術院賞(1972年)、毎日芸術院賞(1972年)、建築業協会賞(1973年)、公共建築百選(1998年)など数多くの賞を受賞しています。

建物を目当てに当館を訪れる方も多く、しばしば建築を学ぶ学生の研究対象になるなど、文化的な価値も高いものとなっています。

しかし40年以上経過した建築物が、その姿を保ちつつ、博物館として来客施設の機能と資料保存の機能を両立し続けることは容易なことではありません。経年による劣化に対応することはもちろんですが、省エネや環境保護、バリアフリー、耐震性など社会的な要求のレベルも竣工当初の頃と比べると非常に高いものとなっています。更にデザイン上の大きな特徴である建物の複雑な形状や、変化に富んだ床面の高低差が省エネやバリアフリーの面では不利な要素となります。そのためには改修工事や修繕等で可能な限り措置していくことが必要となります。

これまで数々の改修工事が行われており、近年では平成19年度から3期に渡る大規模改修工事が行われました。この改修工事では空調設備において、電気料金が割安な夜間に運転効率の良い「ヒートポンプ」を稼働させ、冷温水熱源を「蓄熱」というヒートポンプ・蓄熱システムを採用しました。また、階段昇降機を設置し、トイレも使いやすくきれいに改修しました。これにより快適性や省エネ性が大きく向上しました。

その際にも、機器や配管が露出して建物の外観に変化を与えないよう、最大限の配慮をしています。

このように当館は新しい設備や技術を慎重に融合させることで、建築物の歴史的価値と、現代の建築物に求められる機能の両立を図っています。

次回ご来館の際には今までと少し違った目線で、博物館の展示や体験という「中身」だけでなく、「ハコ」である建築物のデザインも是非楽しんでいただけたらと思います。

(施設担当 増茂直人)

# 戊辰戦争時における江戸っ子の心情や立場を今に伝える錦絵

慶応4年(1868)4月11日、江戸城は無血開城となり、新政府軍に引き渡されました。幕府が崩壊し、薩長を中心とした新たな支配者による江戸占拠を、将軍のお膝元を自負していた江戸っ子はどのように思っていたのでしょうか。当時の古文書は支配者が遺したものが大半であるため、庶民感情を窺うことはできません。しかし、錦絵(浮世絵)に江戸っ子の心情が生々しく画かれていたのです。錦絵は今日では美術鑑賞の対象として認識されていますが、実は錦絵は世相を報じた江戸っ子にとっての印刷物の情報媒体(マスメディア)であったのです。

今回は、慶応4年8月に刊行が許可された、歌川歌重(三代広重)画「当世長ツ尻な客しん」(写真参照・個人蔵)から、当時の江戸庶民の心情や立場の一端を明らかにしてみようと思います。

江戸城を意味する「東楼」の客座敷(画面右上方)には、床の間を背にした主客の位置に東征大総督兼江戸鎮台であった有栖川宮が座り、宮様の右に土佐藩士、左に長州藩士が座し、薩摩藩士が踊っており、料理を前に、まさに宴たけなわの状態です。なお、人名や藩名は着ている着物の柄に「はんじもの」として、たとえば長州は毛利家の家紋のように、図柄や文字で暗示されています。

襖の陰に隠れるように描かれる芸者は、田安慶頼であり、「この芸者もよんどころなく調子を合わせている」という詞書にもみられるように、薩摩藩士の踊りに仕方なく伴奏をつけていることがわかります。徳川御三卿の田安慶頼は、寛永寺に謹慎した徳川慶喜に代わり徳川家をまとめ、努めて新政府に協力した人物です。東征軍の江戸占拠以来、薩摩・長州・土佐藩の者たちが我が物顔で江戸を徘徊する一方、慶頼が有栖川宮のもとで江戸市中の安定に腐心していたことがこのように描かれているのです。

画面左上方をみてみましょう。左が料亭の女将として描かれた天璋院(篤姫)、右が女将の娘として描かれた和宮です。和宮が「本当に長ツ尻な客な客人、早く帰るように呪いをしてやりましょう」と草履を裏返して置けば、天璋院は「このぐらい呪いをしたら良いな、懲りてもう帰るだろうね」と客座敷を逆さまにして手拭いをかけて立てかけようとしています。

天璋院と和宮は、東征軍(新政府軍)に早く出て行ってもらい、再度入城したいと考えていたと庶民はみていたのです。実際は、徳川家臣の安堵を見届けないうちは上京できないと、和宮は朝廷からの勅命による上京勧告を断り続けていただけなのですが。

最後に目を画面右下方に転じてみましょう。東楼の門をくぐって、「四~五人のつれがある。よい座敷があれば借りたのだが、空いているか」と女将に尋ねているのは仙台藩士です。門の前で、座敷、つまり江戸城が空くの待っている者は、会津藩士を先頭に米沢藩士、徳川慶喜、庄内藩士です。この東北・北陸地方の藩士たちは、奥羽越列藩同盟を結び旧幕府方として東征軍と戦った者たちです。会津藩士がにがりきった顔で後ろを振り返ると、米沢藩士は「さあさあ、お入んなせえ。まずともかくも」と話しかけています。最後尾の庄内藩士が徳川慶喜に向って「かしら、さあお入んなせえやし」といえば、慶喜は「豪気で賑やかだなあ。座敷があればいいが」と答えています。

一見したところでは、料亭での宴会風景を描いただけの絵にみえるこの錦絵は、江戸っ子がいかに新政府嫌いであったことを伝えています。



江戸庶民が新しい支配者を快く思っていなかったことを、新政府は見逃しませんでした。慶応4年9月8日に明治と改元、天皇が10月13日に東京入りして江戸城を皇居と定めた後、12月19日に東京府民に酒を振る舞い、人心の掌握を図りました。庶民はこれを「天盃頂戴」として喜び受け入れたといいます。こうして新政府は近代国家建設をめざしスタートを切ったのでした。(展示担当 加藤光男)



## 学芸員ノート 「出前授業」 始めました！

当館では、学習支援の一環として、社会科見学などで来館する小中学生に体験学習の場を提供しています。今年度からは、職員・学芸員が学校に出向いて学習のお手伝いをする「出前授業」も始め、すでに何校かにおじゃましています。

一学期は、「実際に発掘された土器を手にとって観察する」というメニューを出前しています。体験の後に、学芸員が質問に答える時間を設けているのですが、子供たちから発せられる疑問の中には、予想以上に本質を捉えたものも多く、驚かされます。



「これが埼玉県内から発見された縄文土器です」

例えば、「掘り出した土器は、どうして時代がわかるのですか？」という質問。考古学の基本理論にかかわる重大な質問です。「型式学的検討（ものの形態や文様は、方向性をもって徐々に変化するという前提に立って、その新旧関係を検討する方法）と層位学的発掘（地殻変動などによって地層の逆転や不整合が起こらない限り、古い地層は下位に、新しい地層は上位に堆積するという前提に立って、上位の地層に包含されるものは、下位の地層に包含されるものより新しいと考え、層位を重視して発掘する方法）によって、土器の編年（新旧関係の序列の枠組み）が整備されてきたからです。」と言いたいところですが、子供たちどころか大人にも、理解してもらうには、かなり丁寧な説明が必要です。

また、「土器は、今までに何個ぐらい見つかったのですか？」「一番貴重な土器はどの土器ですか？」「土器は、今の値段にしたらいくらぐらいですか？」などの質問も出ました。日本各地で、日々、

発掘されている膨大な量の土器。生活文化の内容を解明する手掛かりとして、すべてが等しく貴重ですが、考古学は、そのことを、伝えられているのでしょうか。改めて、考えさせられるような質問でした。

そして、極めつけは、「土器には、なぜ文様が付いているのですか？」「土器は、どうして変わるのですか？」などといった、究極の質問です。これらは、考古学にとって、最も根源的で深遠な問題であると同時に、「ものは、なぜ装飾されるのか？」あるいは「ものは、なぜ変わるのか？」といった、哲学的な命題でもあります。考古学も哲学も、これらの問題に明確に答えられていませんし、もしかしたら、答えは出ないのかもしれませんが。

このように、子供たちの素朴な疑問は鋭く、学芸員にとって、出前授業は真剣勝負の場ですが、一方で、新鮮な刺激を受けることのできる場でもあります。



土器を手にとって観察

始まったばかりの出前授業は、おかげさまで好評です。子供たちにとっては、日常生活の場である学校で本物を体験できることが新鮮なようです。これから回を重ね、職員・学芸員も経験値を上げ、体験の魅力をより強く伝えていきたいと考えています。ご期待ください。

（学習支援担当 両角まり）

# THE A MUSEUM



## 歴史と民俗の博物館イベント情報(7月～9月)



埼玉県のマスコット  
コウタン

■企画展「絵で語る埼玉の民話－池原昭治・童絵の世界－」を、7月20日(土)～9月1日(日)まで開催します。

### 7月

- 6日(土) 博物館裏方探検隊
- 13日(土) 博物館裏方探検隊
- 20日(土) 企画展「絵で語る埼玉の民話－池原昭治・童絵の世界－」オープン  
歴史民俗講座「埼玉の伝説」、  
博物館裏方探検隊
- 21日(日) アニメ上映会
- 25日(木) ミニアート「だいだらぼっち」
- 27日(土) 博物館裏方探検隊
- 28日(日) お囃子体験教室

### 8月

- 3日(土) ジュニア博物館講座、博物館裏方探検隊
- 4日(日) ジュニア博物館講座
- 10日(土) アニメ上映会、博物館裏方探検隊
- 17日(土) アニメ上映会、博物館裏方探検隊
- 24日(土) 博物館裏方探検隊
- 25日(日) 特別展記念講演会「埼玉のおもしろ絵と  
きで語る民話」
- 29日(木) ミニアート「だいだらぼっち」
- 31日(土) 博物館裏方探検隊

### 9月

- 1日(日) アニメ上映会  
企画展「絵で語る埼玉の民話－池原昭治・童絵の世界－」最終日
- 7日(土) 博物館裏方探検隊
- 14日(土) 博物館裏方探検隊
- 21日(土) 歴史民俗講座「板碑の造立と武蔵武士」  
博物館裏方探検隊
- 28日(土) 博物館裏方探検隊

イベントは事情により変更になる場合があります。  
また、事前に申込みが必要なものもありますので、詳細  
はお問い合わせください。

### ● お知らせ ●

65歳以上の方の観覧料につきましては、条例改正により、  
平成25年7月1日から一般の方と同額になります。ご理  
解のほどよろしく申し上げます。  
なお、7月1日は休館日となります。

### 博物館への資料寄贈をお考えの方へ

まずお電話でご一報ください。 TEL 048-645-8171 (資料調査・活用担当)  
詳しくはホームページをご覧ください。 [http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/?page\\_id=261](http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/?page_id=261)

### 次回予告

## 特別展

# 狩野派と橋本雅邦

10月12日(土)～  
11月24日(日)



交通機関  
東武野田線・大宮公園駅下車徒歩5分

### 埼玉県立 歴史と民俗の博物館 (編集発行)

〒330-0803 さいたま市大宮区高鼻町4丁目219番地  
TEL. 048-641-0890 (管理)  
048-645-8171 (学芸)  
FAX. 048-640-1964  
<http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/>



埼玉県立歴史と民俗の博物館だより  
Vol.8-1 (通巻)第22号  
2013年6月27日発行